



TITLE:

宋代市民生活の一側面：關撲について (特輯 東洋史上の都市)

AUTHOR(S):

入矢, 義高

CITATION:

入矢, 義高. 宋代市民生活の一側面：關撲について (特輯 東洋史上の都市). 東洋史研究 1952, 11(4): 349-371

ISSUE DATE:

1952-02-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/138936>

RIGHT:

宋代市民生活の一側面

——關 樸 について——

入 矢 義 高

宋代の庶民生活——特に都市における市民生活がどのやうなものであつたかを、手つとり早く知らうとするには、周知の如く、宋人みづからが書いた次ぎの數種の專著がある。いまそれらが著はされた先後の順序に従つて舉げる。

東京夢華錄

紹興十七年(1147)の自序がある。

醉翁談錄

卷三と卷四は「京城風俗記」と題され、汴京の正月から十二月に至る年中行事が摘録されてゐる。楊復吉の跋によると、著者の金盈之は嘉定の間 1208—1224 の人だとす。

西湖老人繁勝錄

永樂大典から發見されたものであるが、孫毓修氏の推定

によれば、著者は寧宗 1193—1224 の世の人で、この書は耐得翁(都城紀勝の著者)より前に出來たであらうといふ。しかし孫楷第氏は、反對にそれより後に書かれたに違ひないと考證してゐる(「近代戲曲原出宋傀儡戲影戲考」輔仁學誌十一卷一・二合期)。

都城紀勝

端平二年 1232 の自序がある。

武林舊事

著者の周密の晩年の著である。彼は元の武宗の至大元年 1308 に歿した。

夢粱錄

著者の吳自牧が書いた自序の日附は、甲戌歲中秋日となつてゐる。この干支について、錢大昕は元の順帝の元統

二年1884と考定してゐる（十駕齋養新錄十四）。この考定は動かない。

右の各著作の順序については、なほ精密な考證を必要とする點があるが、いまは差し當つて直接の問題でないから省略する。

以上の文献のうち、東京夢華錄と武林舊事と夢梁錄の三書は、その著述の體例と方法からいつて、一聯の系列に屬するものであるが、これらは舊來の圖書目錄に、或は時令類に入られたり、或は地理類に列せられたりしてゐることも分るやうに、この兩方の性格を兼ね備へてゐる。この體例を關いたのは、もちろん東京夢華錄であるが、しかし夢華錄より前に、この兩方の性格をそれ／＼別箇に、獨立の專著とした文献が北宋にあつた。すなはち、時令（年中行事）については呂希哲の「歲時雜記」二卷があり、地理（主として都市區劃）については宋敏求の「東京記」三卷があつた。どちらも汴京についての記録であるが、惜しいことに今は佚して傳はらない。もつとも後者は、夢華錄の趙師俠の跋が言及してゐるところによれば、「坊門公府、宮寺第宅を載せることは甚

だ詳しいが、巷陌店肆、節物時好には互つてゐない」といふから、市民生活の具體的なディテイルは、記述の範圍外にあつたと見られる。

ことの序でに、同じく汴京について「汴都志」といふ記録を編纂する企てがなされたことを舉げておきたい。それは、宣和年間の末に、太常博士の李子奇の献議によつて、宰相の鄭居中が總纂官に、李子奇と祕書丞の李錞とが編修官に任ぜられ、宋敏求の「長安志」の體例に倣つて、「汴都志」なるものの編纂に着手したのである。しかし鄭居中が死んで、改めて蔡攸がこれに代つたけれども、まもなく靖康の變のため遂に實現せずに終つた。事の顛末は、周輝の清波別志下卷に記るされてゐる。この未完成のままに没した「汴都志」も、果してどの程度まで市民生活の實態について記述する筈であつたか、もちろん知るよしもないけれども、それは恐らく期待しない方が賢明であつたらう。それは「長安志」からの類推によつてだけでなく、抑ゝこのやうな官撰書にこれを期待することが無理な註文であらうから。そのやうな庶民生活の如實な記載は、かへつて上掲の一聯の都市繁昌記——「武林

「舊事」の著者を除けば、すべて經歷の明らかでない無名の筆者の手に成つたこれらの記録にこそ、はじめて求められる。

これから取り上げてみたいと思ふのは、副題に示した「關撲」についてである。それは、この用語が上掲の一聯の記録に共通して頻繁に現はれ、宋代市民の日常生活と關係からぬ特徴的な一慣習であつたと思はれるからである。しかも、これについて從來あまり問題として取り上げられたことがなく、またたとひ取り上げられても、誤解されてゐるか、でなければ曖昧のままに放置されてゐるからでもある。

この關撲のこと自體は、問題としては或は甚だ瑣末なことかも知れない。しかし、特に中國經濟家史のかたからは、そこから更に新しい問題を引き出して頂けるのではないかと、ひそかに期待してゐる。元來わたくしは東洋史家でもなければ、中國經濟史についても門外漢であるので、單に今までわたくしが掻き集めた材料に本づき、それらを纏めてみるることによつて、この未分明な慣習の實態を幾分でも解きほぐしたいと思ふに過ぎない。それも、まだ十分には分らぬところが

少くないので、博雅の士の御指教を望むばかりである。

以下、敘述の便宜上、宋代のものからは主として東京夢華錄に材を探ることとする。それは又、關撲についての宋代の記録のうち、この書物のそれが最も特徴的であり、變化に富んでゐるからでもある。

關撲は、或は關博（關搏）とも書かれ、關賭・撲錢・擲錢・擲錢などとも云はれ、またその行爲者（商人と客と）の各立場から撲賣（博賣）・撲買（博買）とも云はれ、簡単に撲（博）とも稱される。先づ夢華錄の記載を卷數の順に拾ひ上げてみれば左の如くである。

1、毎日如宅舍宮院。則有就門賣羊肉・頭肚・腰子・白腸・……香藥・果子。博賣冠梳・領抹・頭面・衣着・動使・銅鐵器・衣箱・磁器之類。亦有撲上件物事者。謂之勘宅（卷三、諸色雜賣條）

2、正月一日年節。開封府放關撲三日。……坊巷以食物・動使・菓實・柴炭之類。歌叫關撲……向晚。貴家婦女縱賞關賭。（卷六、正月條）

3、宣和年間。自十二月。於酸棗門門上。如宣德門。元夜點

照。門下亦置露台。南至寶籙宮。兩邊關撲。買賣（同上、十六日條）

4、殿上下回廊。皆關撲。錢物飲食。……橋上兩邊。用瓦盆內擲頭錢。關撲。錢物・衣服・動使。遊人還往。荷蓋相望（卷

七、三月一日開金明池瓊林宴條）

5、池苑內。除酒家藝人占外。多以綵幕繖絡。鋪設珍玉・奇玩・疋帛・動使・茶酒器物關撲。有以一笏撲三十笏者。以至車馬・地宅・歌姬舞女。皆約以價而撲之。出九和合。有名者任大頭・快活三之類。餘亦不數（同上、池苑內縱人關撲遊戲條）

6、遊人往往以竹竿挑掛終日關撲。所得之物而歸（同上、駕回儀衛條）

7、十一月冬至……官放關撲。（卷十、冬至條）

第1の文中の「亦有撲上件物事者」（上に述べた物を撲賣するものもある）とは、羊肉……果子くだものの類のいはゆる小吃を、普通の如く賣るものの外に、それを「撲」によつて商ふものもあるといふ意である。

第2の「放關撲」とは、第7のそれと同じく、年節（正

月）や清明節や冬節（冬至）などの節目に限つて、お上から正式に關撲を差許したことである。第5に示した原書の標題「縱人關撲」も同じ意味である。曾我部博士はこの2の例を引用され、「關撲を放つ」の三字を賭ごとの遊びを行ふことの意に解されたが（「開封と杭州」三〇頁）、その「賭ごとの遊び」といふ義は少くとも關撲の語のみについてならば當を得てゐると思はれる。佩文韻府にはこの一句を引いて案語を加へ、關撲は今の攤錢賭・擲財物の類の如しと云つてゐる。攤・擲の義については後述で明らかにならう。この一文では、食物や動使どうでのほかに薪炭のやうな日用品をも撲賣したことに注意せねばならぬ。

第4の例は更に注目すべきである、關撲のやり方について素燒きの盆のなかに頭錢をほうり投げるといふ具體的な記述があるからである。頭錢とは、後に述べるやうに、サイコロの代りに用ひる一文錢であつて、般錢とも云ひ、その表の字面が赤く染めてあつたらしく、これを三枚か六枚か八枚用ひる方法があつた。それを何回か投げて表と裏のそれ／＼が出た

回数と、それ／＼の出かたの種類とを標準にして勝負を決める。詳しくは後述にゆづる。

第5は最も特異な例である。先づ、一笏（銀一錠）を賭けて三十笏（銀三十錠）をものにする場合があるといふこと、その當り率よりも、銀そのものを賭け物にしたといふことが注目すべきことの第一である。第4の例の「錢物」といふ語も、やはりこの意であらう。つぎに、車馬や地所（不動産）から歌姫舞女といふ人間まで、撲によつて賣買したといふことが、注目に値することの第二である。その次ぎは「出九和合」云云といふ、關撲についてのテクニクが出てゐることである。

かつて加藤繁博士は「唐宋時代に於る金銀の研究」第三章第十三項に、この一文を「而撲之」まで引用されたのち、「關撲の關は交關とも熟字せられ、取引を指すやうである。撲は賣撲・買撲・撲買などと熟字せられ、セリイチを意味するやうである。關撲も亦セリイチと解して差支へあるまい」と説いてゐられるが、この解釋が當を失してゐることは、後に明らかとなるであらう。

「出九和合」といふテクニクについては、實はつきりしたことが分らない。ただ能改齋漫錄卷七に見える次ぎの記載は、これと密接な關係があるらしく思はれる。

世傳博戲。有出九入十之說。謂之攤賭。故律云。諸博戲賭財物。并停止・出九・和合者。各令衆五日。豫章（羅從彥）詩。肉食傾人如出九。

右の文中に引かれた律は、更に詳しくは重詳定刑統卷二十六に見られるが、それには左の如く「議」の解説がついてゐる。

諸博戲賭財物者。各杖一百。舉博爲例。餘戲皆是。賊重者。各依已分。准盜論。輪者亦依已分爲從坐。其停止主人。及出玖。若和合者。各如之。賭飲食者不坐。

議曰。……停止主人。謂停止博戲賭物者主人。及出玖之人。亦舉玖爲例。不限取利多少。若和合人。令戲者不得財。杖一百。若得利入已。並計贓。准盜論。衆人上得者。亦准上例倍論。故云各如之。賭飲食者不坐。謂即雖賭錢。盡用爲飲食者。亦不合罪。

停止主人とは、つまりバクチャド（賭場）のヤドヌシ（胴元）のことであつて、漢書の張敞傳の注に、「囊橐」ヌスビ

トヤドを釋して「容止賊盜、若囊橐之盛物也」といつてゐるのと同じ言ひ方であらう。「和合する者」とは、この解説によれば、博徒と馴れあひで客を陥れるサクラを言ふのであらう。それにしても「出九」といふ意味は依然として明らかでない。また以上の罰則規定では、これが關撲と賭博とをどの程度まで區別してゐるのかも明白でない。しかし上述した如く、關撲と雖も、それが公認されたのは節日だけで、それ以外は公式には禁止されてゐたのであるから、關撲もやはり賭博行爲に類したものと見做されてゐたと考へられる。ただし例外として、飲食物を賭け物として單に飲食に供するだけの程度に止まるものは默認されてゐたことが分る。全體から見て、關撲についての記載では、やはり飲食物や日用品、玩具、服飾など、こまごました品物を賭け物とする場合が多いのである。ここの例のやうに、不動産や人身の賣買にまで及ぶことは、かなり特殊な例ではないかと思はれる。

この文の末に擧げられた任大頭・快活三は、他に例證がないが、種々ある關撲の方法の中で、殊にやかましい張り方なのであらう。そしてそれらは恐らく規模の大きい、純然たる

賭博にほゞ近いやり方だつたらうと推察される。

さきに引いた能改齋漫錄には、出九入十の方法を「攤賭」といふとあるが、この用語については、唐の李匡の資暇錄卷中に見える説明をここに援用しても、さほど見當外れではあるまい。

錢戲有每以四文一列者。卽史傳所云意錢。是也。俗謂之攤錢。亦稱攤鋪。

「意錢」の語は後漢書に見えるから、錢を用ひる賭けごと、つまり錢戲はすでにこの頃からあつたのである。その注にも、即ち今の攤錢なりとあつて、唐代では恐らく民間で普通に見られた慣習であつたと考へられる。それは已に遊びの域を出て、賭博類似の一種の取引法にまでなつてゐたかと思はれる。といふのは、さきに少しく言及した「頭錢」の語が、すでに唐代に生じてゐるからである。老學庵筆記卷十に次ぎのやうな文が見える。

唐小説載。李紆侍郎罵負販者云。頭錢價奴兵。頭錢猶言一錢也。故都俗語云。千錢精神頭錢賣。亦此意云。

ここに引く唐の小説とは因話錄であつて、唐語林にも引用さ

れてゐる。負販者を罵つて「頭錢價奴兵」と云つたとあれば、この頃すでに商人はその商ひの手段に頭錢を用ひるといふ慣習をもつてゐたのではないかと推察される。老學庵筆記の著者陸游は、頭錢を「一錢」で説明してゐるが、それは宋代以來、一文錢を頭錢として用ひるのが通例だつたからである（後述の西湖老人繁勝錄などの例を参照）。「故都」とはいふまでもなく汴京を指していふ。

以上、先づ夢華錄の例について、その要點のみを指摘した。なほ悉さないところは、以下の記述のなかで關聯せしめつつ補説することとする。

上掲の夢華錄の例文だけでは、關撰の實際のやり方がまだ十分に示されてゐるとは云へない。その實例を具體的に示してくれる資料が必要である。しかし宋代のそれを物語る資料は今までのところ案外に少く、かへつて元・明に至つて頗る詳密で如實な記載が見出されるのである。しかし宋代における實例の記録も、更に文献を搜索すれば、なほ追加できるかも知れない。

先づ蘇象先の「丞相魏公譚訓」を擧げよう。

祖父〔蘇頌1020—1101〕應舉之年元日。遊相國寺。時浙本中字前漢書方出。祖父戲撲之。爲錢五千。十三淳。一擲皆紅。鬻書者曰。未常〔嘗〕領所下金。祖父遂行不取（卷八）

この例では書籍が賭け物となつてゐる。だいたいこの關撰は、露店商人や行商人の誰でもが皆やつたといふものではないらしく、それをやるのは専らこの方法によつてのみ商ひを營んだ、謂はば特殊技能の持ち主が大部分だつたやうに想像される。もつとも彼等のなかには普通の賣買法とこれとを並用したものがあるらしいことは、後述の小説の例で推定できる。彼等は節日や縁日に、盛り場や遊山どころの路邊に店を張り、主として日用品類の商品を賭け物として客を呼ぶ。撲をやる客は先づ自分が賭ける品物を決め、その品物の價格に應じて幾許かの金を張る。（その比率はわからない）。と共に如何なる撲の方法を選ぶか、その頭錢を何枚何回に投げるかも、その品物（博具）の價格と睨み合はせて決まるものと考へられる。高價なものに賭ける場合は、當然投げる回數は多い。客の投げる頭錢が、各回とも、表か裏（或は表や裏）が

きれいに揃つて勝利を得れば、客はそれに應じた獎金と共に、賭けたその品物を手に入れることになる。元・明の例をも考へ合はせて推定した結論を先づ大まかに示せば、以上のやうである。客が負けた場合については、その實例があるから後で述べる。

ところで今のこの例では、浙本中字前漢書の價格は五千文、つまり銀五兩と決められた。前掲の夢華錄の例第五の「約するに價を以てして之を撲す」といふのが、このことであらう。この價格に應じて、投げる回数は十三回となつた。

「十三淳」といふのがそのことだと考へる。淳はまた純とも書き、狹義には勝ち目が出ることを意味するが（後述の燕青博魚劇における如く）、この場合や、後に示す西湖老人繁勝錄における「多撲十淳」の如きは、廣義に頭錢を投擲する回数をいふ。「十三淳」とは十三回勝負といふ意であらう。たゞしここでは、一回の撲に頭錢何枚を用ひたかの記述がない。もし繁勝錄にいふ如く「三文一撲」、つまり一回の撲に一文錢の頭錢を三枚用ひるとすれば、延べ三十九枚投げることになる。

さて次ぎの「一擲皆紅」といふことは、要するに、みごとな勝ち目が出揃つたことを意味するには違ひないが、「紅」とは一體どういふことであらうか。それについては、後に擧げた燕青博魚劇の「則這新染來的頭錢不甚昏」（この染めたての頭錢は、別にかすれちやゐません）といふ句を考へ合はせたい。「昏」とは「昏鈔」といふ時の昏の意と同じであらうが、「染」とはどういふことか定かでない。しかし唐代以來のサイコロの様式から類推して、やはり赤い色に頭錢を「染」めたものと考へる。

胡應麟の莊岳委談にいふ――

今の骰子でに么（一の目）と四とはみな緋色である。宣室志によると、張某が見たものは、二十一眼（骰子の目の總數）のうち、ただ四眼だけが火の色のやうに輝いてゐたとある。とすれば、ただ四だけが緋色だつたにすぎず、么はさうでなかつたわけだ。

唐人の骰子では、四眼だけに緋色を加へ、或は相思子を中に嵌めこむことになつてゐた。溫庭筠の詩に、「玲瓏たる骰子、紅豆を安む、骨に入る相思を知るやいなや」と。

相思子とは今の紅豆であつて、それを四粒ごと一面に飲め
こんだのである。

つまり四眼だけにせよ、骰子の眼を赤くすることは、唐代からのしきたりであつた。とすれば、同じく骰子の役割をなす頭錢を赤く彩色したであらうことは、當然考へられてよい。

しかし頭錢のどの部分を彩つたかがなほ明らかでない。骰子から推せば、恐らく錢の表の字樣だけを彩つたのではなからうか。少くとも、兩面とも彩つたのでないことは確かである。何となれば、關撲においては、頭錢の表と裏の出かたが勝負を決する基準なのであり、そのため表と裏とを截然と識別し易くしておく必要上、どちらか一面（たぶん表面）のみを彩色したと考へるのが自然だからである。燕青博魚劇で、頭錢がばやけてゐないと云つてゐるのは、表とも裏とも區別しかねるやうなインチキ臭い頭錢ぢやない、といふことを強調したのである。

以上の如くであれば、ここに「一擲皆紅」といふのは、一投げする毎に頭錢がみな揃つて紅の面を出したといふことに相違ない。このやうな見事な采の出かたを、術語では渾純、

または渾成といふ。燕青博魚劇に「一博六渾純」とあるのも、同じ意味である。

客は鮮かに勝つた。前漢書は當然この客のものである。ところがその本賣りが云つた――

未常〔嘗〕領所下金。

おいそれとは本は渡せない。といふ理由がこの句である。その意味は、貴方が賭ける前に先づお張りになるべき金をまだ頂いてゐない、といふことらしい。この客は最初氣まぐれに「戯れに之を撲した」ので、その張り金を置くことを忘れたのであらう。しかし、いま明らかに勝つた以上は、後でその金を出しても、その金はそのまゝ再び品物と共に勝者の手に歸する筈である。しかしこの客の蘇頌は、前漢書を取らずにそのまゝ立ち去つた――あとにまだ少し話は續く――それを見てゐた人々はみな口惜しがつたが、しかしかくも恬淡な人柄であるからには、必ず大きな吉祥があるだらうと思つた。果して翌月、第一等に及第したといふ。

右の一例によつて、關撲の方法の輪廓についてはほゞ明らかになつた。もつとも説明の便宜上、後述の他の諸例からも

考へ合はせた結果を、先きにごへ援用したから、部分的にはなほ後段で検討せねばならぬ。しかし一應その大體の輪廓が以上できまつたと思ふので、ここに、關撲についてすでに與へられてゐる輪廓的説明を一つ紹介しておかう。それは「辭海」の撲賣の項に見えるものである。

撲賣、宋元民間盛行一種博戲。法以錢爲博具。以字幕定輸贏、市人小賣亦用之。贏者饒錢購物、謂之博賣、通作撲賣。

西湖老人繁勝錄云、有御街撲賣摩侯羅、撲賣牛郎織女、撲賣時樣翻騰畏養促織盆等。

これは關撲法の輪廓についての解説としては、簡單ではあるが極めて妥當であり、その點でたゞ一つのものである。もつとも右の文の全部は、實は孫楷第氏の説をそのまゝ借用したのであつて、そのことは、右の説明文の殆んどそのまゝが黎錦熙氏の「巴鐔解」（文學季刊第三期所載）の中に孫氏の説として擧げてあるから確かである。それは兎も角として、右の文について少しく解説を補つておかう。

「錢を以て博具と爲す」といふのは、既に明らかなやうに、一文錢をサイコロ代りの頭錢として用ひることであり、

「字幕を以て輸贏を定む」とは、その頭錢（骰錢）の表と裏の出かたで勝敗を決めることである。錢の表（面）と裏（背）を字幕といふことについては、東皐雜錄に説明がある。

今人擲錢爲博戲者、以錢文面背分勝負、曰字、曰幕。前漢西域傳云、罽賓國以金銀爲錢、文爲騎馬、幕爲人面、如淳曰、幕音漫。

ここで二つ明らかになつたことがある。一つは關撲・撲賣などといふ時の「撲」が「擲」の意であることである。夢華錄の第4例にも「頭錢を擲^なげる」とあつた。楊聯陞氏は「撲」を hit と定義してゐられるが（後述論文）、正しくは throw でなければならぬ。元・明になると、撲の代りに擲または跌（ころがす）の字を用ひることもある。投げられた頭錢が表と裏のどちらへ轉がるか、その轉がし方（又は轉がり方）に重點をおいた言ひかたである。燕青博魚劇と水滸傳（第四百回）は、その最も顯著な例である。

つぎに明らかなことは、「幕」の音がマン（漫）であるといふことである。近世の口語文獻では、錢の裏をいふとき錢の字を用ひるのが多いし、現在でも杭州方言には字兒・鐔兒

の語があるといふ。しかし鏝の字は、必ずしも錢背だけに限らず、廣く貨幣（主として銅貨）そのものを指して鏝とか鏝兒といふ場合が近世には多い。元・明の戯曲小説では、一般にこの後者の方の用法が普通である。上掲の黎氏の論文「巴鏝解」には、この點について言及するところがあるから、就いて参照せられたい。

再び「辭海」引用の孫氏の説明に戻らう。「贏者饒錢購物」とは、勝者（ここでは、客が勝つた場合）は勝ち取つた獎金を、賭けた品物を取得する以外に餘計に手に入れることをいふ。その獎金の中から品物の代價を拂つて購入する謂ではない。「饒」とは俗語でオマケがつくことをいふ。序でながら、その下に引用された西湖老人繁勝錄の「撲賣摩侯羅」の句について、小林太市郎氏の「七夕と摩侯羅」（支那佛教史學四卷三號）に、「撲とは、略ば高橋氏の説の如く（高橋盛孝氏の「摩侯羅考」關西大學研究論集を指す）、その日の景物をその夜のうちに賣盡さうとして、商人の喧しく罵れる狀を指すのであらう」と解してゐられるのは、恐らく撲賣を拍賣（セリウリ）の類語として誤解されたからではないかと思はれる。

撲賣と拍賣とは、その字音は甚だ近いけれども全く別であつて、混同は許されない。しかしこの混同はすでに A. C. Moule 氏によつても犯されてゐて、氏の “Wonder of the Capital” [*The New China Review* 3 (1920) p. 12—17, p. 356—367] に、都城紀勝からの引用文に註して、to sell by auction (more commonly 拍賣) と定義され、また「菓子やその他の食品、玩具などを、或る種の auction 或は恐らく lottery によつて販賣すること」と見てゐる。これはもちろん誤りである。

近人楊聯陞氏は昨年發表された論文 “Buddhist Monasteries and Four Money-raising Institutions in Chinese History” [*Harvard Journal of Asiatic Studies* Vol. 12, No. 1, 2, Jun. 1950] において、その脚註で關撲と撲賣を簡單に取り上げられ、右に擧げたムール氏の解釋を否定された。その限りにおいては正しい。しかし楊氏は關撲と撲賣とを一應區別して左のやうに規定された。

Kuan-p'u (關撲) definitely referred to gambling by means of games of chance like coin-throwing and lot-drawing

for prizes, which from the dealers' point of view meant the sale of goods.

The term p'u-mai (撲賣) meaning "gamble" or "sell", seems to have applied to games of chance played by hawkers and peddlers with their customers, as a sideline to regular sales.

そして續いて氏は「とすればそれ（撲賣）は關撲と、小規模の場合に限つて同義語と見なしてよからう」と言つてをられる。これは當らない。この二つの用語の間には、規模の大小による區別は全くないのである。「撲賣」は商人の側から云ふのであり、「撲買」は客の側から云ふのであり、「關撲」はその總稱であるに過ぎない。また、氏が上掲の關撲の説明中で、「貨幣を投げる」方法のほかに、lot-drawing クチ引きの方法を加へてゐられるのは、一體どんな證據に本づかれたのだらうか。わたくしの知る限りでは、そのやうな形迹は全然ない。

前に舉げた丞相魏公譚訓の例のほかに、關撲の方法について

て更に具體的に示す宋代の例がある。それは西湖老人繁勝錄の「都城鄉風」の條に見える次ぎの文である。よく讀めないところがあるが、一應句讀を切つて舉げる。

擡采覆。大蝦・票子・郎君糞之類。多撲十淳。三文一撲。撲一隻鬪鷄。饒兩貫。會或饒一貫伍伯文。足拗一錢。饒三撲。攔街鬪撲。

はじめの「擡采覆」の一段は、よく分らない。「大蝦」云云は、任大頭・快活三に類した張り方の種類の名であらうが、「擡采覆」の意は分明でない。字面からすれば、伏せた盆を開けて、中の骰錢の目を讀むといふやうなことからしく思へる。しかし何とも云へない。「采」は彩と同じで、通鑑の後梁紀に見える胡三省の註に、簡にして要を得た説明がある。曰く、

采本是采色之名、指其文以言也。如黑白之以色別、雉幘之以物別、皆采也。投得何色、其中程者勝、遂名之爲采。今俗語、凡事小而幸得者、皆以采名之、義蓋起此也。

この胡註は、實は演繁露卷六の文に本づくが、それについては省略する。

次ぎの「多撲十淳、三文二撲」とは、すでに上述したやうに、多くは十回勝負で、その一回の撲には一文錢三枚を頭錢に用ひるといふ意であり、次ぎは、その一例として鬪雞を賭け物とした場合に、二貫文ないしは一貫五百文もの獎金を得ることがある、といふのであらう。

その下の「足拗」云々は、どういふことか見當がつかない。「饒三撲」とは、決まりの回数以外に、オマケとしてなほ三回投げられる。といふ意に違ひないが、「足拗一錢」が分らない。後述の揚州畫舫錄にいふ「拗一」をここに援用することは、恐らく非であらう。

關撲の種類の名が、これまで度々出たので、その關係から、つぎに水滸傳の例を擧げておかう。それは賭博と關撲とを分けて書いてゐる點でも興味がある。

舞臺の下の方には三四十のテーブルがあり、どれも黒山の人だかりで、骰を擲^なげてバクチをやつてゐる。その擲色^{はくし}の名前といへば、一通りではない。それ六風兒・五么子・火燎毛、朱窩兒といった工合。それから地べたにしやがんで、錢を擲^{ころ}がしてゐる連中があり、その人だかりが全部で二

十餘り。その錢又がしの名前も、一通りどころではない。

それ渾純兒・三背間・八叉兒といった工合。骰を擲^なげてゐる連中は一とか六とか怒鳴つてゐるし、こつちでは錢ころがしの連中が字^{おもて}とか背^{うら}とかわめいてゐる（忠義水滸全書第百

四回）

右のうち、ばくちとルビをつけた「擲色」の「色」は、骰と同音同義である。關撲を擲^な錢といひ、また擲^な錢といふことは、すでに前に述べた。その名前の中で、渾純兒については、やはり上に言及したが、また次ぎに燕青博魚劇の例でも重ねて説くであらう。八叉兒といふのは、後に擧げる揚州畫舫錄の説明によれば、一文錢八枚を頭錢として用ひる法であるが、しかし同じ「八叉」といふ語であつても、清初^シの頃の用語がそのまゝここへ同定できるかどうか。もつとも、水滸傳の百回以後は明末^シの人の手に成るらしいから、さう同定しても、さほど大きな誤を犯すことにはなるまい。なほ序でながら、前記の楊聯陞氏の論文には、關撲の例として水滸傳第三十七回（百回本・百二十回本では第三十八回）が引かれてゐるが、それは誤である。その例は賭博であつて、關撲ではな

い。

この水滸傳の例と似通つてゐて、しかも關撲のやり方を簡單ながら説明してくれてゐるものに、朝鮮人の著「朴通事諺解」がある。

開春時、打毬兒。或是博錢・拿錢。〔註〕質問云、兩人賭錢、將八文錢捏在手指、擲之於地。有八背、謂之八八。有七字、謂之七七。此是爲勝。無八八七七、此是爲輸。拿錢卽猜拳也。質問云、此二人以錢相賭之戲、跌過兩背相同爲贏（卷上、十七葉左）

この書物は、元末のシナの社會風俗を當時の口語で會話體に書いた、朝鮮人のための華語教本であるが、その註はみな後人の手になる。しかし概してよく行き届いた精確な註なので、我々を益することが多い。

ここには博錢と拿錢とを對して並べてゐる。博錢は撲錢であること勿論であるが、拿錢の語は他に用例を知らない、ところ、この註には、一文錢八枚を用ふる法（つまり八文）だけが擧げてあつて、八回ウラが出るのを八背といひ、七回オモテが出るのを七七といつて、この二つが勝ち、そのどち

らの采も出なければ負けだと言ふ。至つて簡單な基準なので物足りないが、ここはこれで満足しておかう。

次ぎの拿錢の説明は、果して正鵠を得てゐるかどうか保證しがたい。「跌過」の「跌」は擲と同音同義。「兩背」は「面背」の誤であらうし、「贏」はもちろん贏の誤である。「面背相同」とは、規定の投擲回数を通じて、表と裏の出た回数がそれ／＼半々に揃ふことであらう。しかし、それと博錢の法との基本的な違ひがどこに在るかは、一向に明らかでない。

以上述べ來つたところで、關撲の方法や種類などがかなり詳しく分つてきた。しかしまだその細部——原理だけでなく、特にこの慣行のブラクティカルな面では、つきりしない點が残つてゐる。そのやうな面については、ここで小説と戯曲のなかに描寫された實例を參考するならば、大部分が解明できさうに思へる。もつとも、このやうな通俗文藝における取材と描寫のしかたは、小説的・戯曲的效果を狙ふために、とかく黒か白か、成か敗か、どちらかはつきりした極限に焦點をおき勝きである。勝ちならボロ勝ちを、負けならボロ負けを

のみ取り出して見せるのであつて、その點頗る鮮やかである。したがつて多少、そこに誇張的な要素が混入することは、勢の然らしめるところである。この點に對して顧慮を拂ひさへすれば、いま關撲のより實際的な面を見るためには、この戯曲小説の例は極めて恰好な材料であると言へよう。次ぎに擧げる三例のうち、初めの二例は商人側が負けた例、終りの一例は客の側が負けた例で、勝敗の雙方の例がそろつてゐるので都合である。

最初の例は、明末に刊行された短篇小説集「古今小説」の第十五篇「史弘肇龍虎君臣會」に見える。この一篇は、その手法や文體や用語から推して、もと宋代の語り物であることは間違ひない（鄭振鐸「明清二代的平話集」中國文學論集・孫楷第「三言二拍源流考」國立北平圖書館刊五卷二號）。いちおう原文を示しておかう。

只見一個撲魚的、在門前叫撲魚。郭大郎遂叫住撲。只一撲撲過了魚。撲魚的告那貴人道、昨夜迫劃得幾文錢、買這魚來撲、指望贏幾個錢去養老娘、今日出來、不曾得一文、被官人一撲撲過了、如今沒這錢歸去養老娘、官人可以借這魚、

去前面撲、贏得幾個錢時、便把來還官人。

すると一人の撲魚的（魚を賭け物とする關撲商人）が、表の方で「撲魚々々」と呼び賣りしてゐる。そこで郭大郎は呼びとめて撲してみたが、たつた一度の撲で、魚を射とめてしまつた。すると撲魚的がこの旦那に泣きついて言ふやう、「私はゆふべ何文かの錢を工面してこの魚を仕入れ、これを撲賣して幾らか金を儲けて、おふくろを食へさせてやるつもりでしたが、さて今日商ひに出てみると、一文も儲かるどころか、旦那に一たまりもなく負けてしまひました。もう持つて歸つておふくろを食へせてやる金がありません。旦那、ひとつ何とかこの魚を貸して下さい、あちらへ行つて撲を（やり直）してきますから。幾らか儲かりましたら、持つて歸つて旦那にお拂ひします。」

右の例でも、撲をやる前に先づ客が幾ばくかの金を張る筈であるが、そのことは出てない。しかし、すでに丞相魏公譚訓の例で指摘したやうに、書いてなくてもそのことは必ずあつた筈である。もし商人が勝つた場合なら、その客が張つた金

は商人の儲けになるわけであり、そして彼はその同じ賭け物（商品）を更に何度も撲賣の具に使ふことができるわけである。この撲魚的は御覽の如く甚だしがない商人であつて、その商品はたつた一匹の魚だけであり、また、客に支拂ふべき獎金の準備さへ一文もない。全く一かバチかの捨て身で出て來たのが、文字通り元も子もなくなつてしまつた。そこで客に哀訴して、あなたのものになつたこの魚を暫く貸して貰つて、もう一度やり直させ欲しい。もし勝つたら、それでお支拂ひをするから、と嘆願したのである。もちろんその場合でも、魚はやはり客に與へねばならぬ。上に舉げた「辭海」の説明に「贏者饒錢購物」といつてゐる意味は、まさに右の例で適切に示されてゐよう。

次ぎもやはり同じく魚を賭け物とし、同じく商人側が負けた例であるが、元代^ゲのものながら、この慣行の具體的なディテイルが最も詳しく出てゐる點で、頗る珍重に値する。それは元の李文蔚が作つた戯曲「燕青博魚」の第二幕の例である。これまでも度々引用したが、つぎにその關係の箇處の

全文を、順を追つて一段づつ舉げてみる。主人公の燕青は、水滸傳中の英雄の一人、「博魚」は言ふまでもなく「撲魚」と同じ。

〔燕青唄ふ〕可憐咱十分貧窘。恰纔那打魚人賒與俺這賣魚人。憑着我六文家銅鏝。博的是這三尺金鱗。……我去那新紅盒子內擎着這常占勝不占輸。只愁富不愁窮。明丟丟的幾個頭錢問……。

あはれや俺はなんといふ落ちぶれやう、さつき漁師^{わうし}がこの魚賣りの俺に一匹前貸してくれた。この六文の銅錢を本にして、賭け物はこの三尺の金鱗。……俺はこの新しい紅い匣の中に納めた、いつも勝ちが出てドヂを踏まぬ、儲かることは請け合ひの、きら／＼光つた幾つかの頭錢に伺ひを立てる。……

ここでは一文の銅錢六枚を頭錢として用ひ、商品は一匹の魚である。「銅鏝」の「鏝」が貨幣の通稱であることは既に説いた。「新紅盒子」といふのは、その頭錢を納める蓋^{ふた}のある盆であらうか。夢華錄の例4に「瓦盆を用ひてその中に頭錢を投げる」とあつたのと、何か關係があるかも知れぬが、し

かしここでは頭錢は地べたへ投げるのであつて、別に容器の中へ投げるのではない。むしろそれが普通なのであつて、夢華錄の上例は、地上でなく「橋上の兩邊」で行はれる場合だから、頭錢の落失を防ぐため特に容器を用いたものと解したい。その次ぎには頭錢について長い修飾句が附いてゐるが、もちろんこの商賣の幸先きを祝つてのことである。その次ぎの白のやりとりはかうである。

〔呼ばはる〕魚を博しませう、く。

〔客〕こりや見事な魚だ。そいつは賣るのか、それとも博するのか。

〔燕青〕この魚は博なりと賣るなりと、どちらでも。

〔客〕そいつは目方はいくら、値段はいくらだ。正直なところを言ひなさい。

〔燕青唄ふ〕這魚呵重七斤八斤。你若博呵。要五純六純。着小人呵也覓一文半文。……

この魚は目方は七八斤がとこ。もし博をなさるなら五回か六回勝負、まあ一文か半文は儲けさせて貰ひます。

撲をやる前に、先づその商品の價格が決まると、その價に應

じて撲の回数も〔恐らく方法の選定も〕きまる。このことは既に上に述べた。ここでは、七八斤もの大ものだから、五純か六純にして欲しいと言ふのである。言ひかへれば、六回やるなら六回とも勝ち目が出て始めて手離す、二三回くらゐの勝ち目では滅多に手離せぬ、と大きく出ておいて、しかしだからといつて、決して暴利を狙つてゐるわけではない。五六回勝負で、正直のところせいゝ一文か半文の利潤なんです、と客を信用させるわけである。

〔客〕頭錢をもつて來な。ひとつお前とこの魚を博してみよう。

〔燕青〕兄さん、あんたほんとに博をやんなさる氣なら、

〔唄ふ〕……我將那竹根的蠅拂子綽了這地皮塵。

……先づこの竹の蠅叩きで、ここの地面の塵を拂ひのけ、

〔云ふ〕兄さん、正直に博してもらひませう。

〔客〕俺はちよつくらやつてみるだけのこと。正直もインチキもあるもんかい。

〔燕青唄ふ〕 不要你蹲着腰虛土裏縱。疊着指漫磚上墩。則要你平着身往下撇。不要你探着手可便往前分。

この一段は翻譯不可能。インチキな投げ方は困ると豫め斷つてゐることには違ひないが、見慣れない用語があるため、はつきりした意味は分りかねる。虚土・縦・漫・分の各語、いづれも明らかでない。意を汲んで解すれば、腰を落して軟らかな地面へふわりと投げるのは困る、指を重ねて磨滅した磚の上へさつと放るのもお斷り、しやんと立つて下向けに投げて下さい。怪しげな手つきで前の方へ妙な投げ方をされるのは困る、とでもいふのであらうか。要するに、轉がりにくい條件の地面を狙つて投げたり、するい姿勢を取つたりすることを禁じてゐるに違ひない。

〔客〕 どれ頭錢をよこした、しらべてみる。

〔燕青〕 へい、これが頭錢。

〔客〕 この錢はかすれてる。表も裏もよくない（原文は這錢昏、字鏤不好）。

〔燕青〕 兄さん、かすれちやゐませんぜ、目を皿にして見て下さいよ。

〔唄ふ〕 則這新染來的頭錢不甚昏。可不算先道的准。手心裏明明白白擺定一文文。

この染めたての頭錢、別にかすれちやゐません。（第二句未詳）たなごころに一文づつ、はつきりきちんとお重ねなされ。

「染」の義については上述した。「擺定」とは、ちゃんと並べる意ではあるが、それを握るのか、それとも掌を平面に開いた上に置くのか。しかし餘り細かい穿鑿はやめておかう。たゞ一つほど明らかなのは、一回の撲にはその六枚全部を一度に投げることである。一枚づつ六度に投げるのではない。それは、この第三句の「一文文」といふ表現と、後段の描寫とを考へ合はせて、殆んど疑ないと思ふ。

〔客、博をやる〕 そら六枚の錢を博した。俺が勝つたぞ。

〔燕青唄ふ〕 呀呀我則見五箇鏤兒乞去磕塔穩。更和一箇字兒急留骨碌滾。諛的我咬定下唇。掐定指紋。又被這個不防頭愛撇的覷兒隱。可是他便一博六渾純。

ややや、見れば五つの裏〔を出した錢〕がカタリと収まつた。それともう一つの表〔を出した錢〕がコロ／＼轉が

る。たまげて俺は下唇を噛みしめ、指の皺を握りしめる。と又こいつも、人の裏を搔く(?)ひねくれものの軀のために、ちゃんと「裏を出して」収まつた。いやはや、この人はたゞの一博で六の渾純だ!

「渾純」とは、前にも言及したやうに、全部揃つて表か裏かが出ることである。色々ある勝ち方のなかでも、これはその最も鮮かなものであるらしい。ところでこの例では、先づ第一回の撲がこのやうな見事な采を出したので、それで早くも勝敗は決してゐる。すると、最初に五回か六回かの勝負に取り決めてはあつても、もしその第一回が渾純と出れば、それだけで事は決してしまつて、その後の撲は不要となるものゝ如くである。然りとすれば、上に引いた丞相魏公譚訓の例でも、十三回勝負のうち、その第一擲が渾純と出たので、それで勝敗が決してしまつたのかも知れぬ。前にその文の「一擲皆紅」を每一擲の意に解したが、一應ここに訂正しておく。もつともそれは、この慣行の時代による内容的變遷といふことを度外視した上でのことであるから、この解釋はなほ検討を要すべき點があるけれども、今はそれ以上に立ち入つて考

へる餘裕がない。

燕青は完敗した。そこで彼が客に哀願したことは、古今小説に於る場合とそっくり似てゐる。

「燕青ひざまづいて」兄さん、魚はあなたに差上げますが、哀れなはこのわたし、その資本は人さまのものです。何とかひとつこの魚を貸して下さい。ほかで一勝負かちましたら、すぐ持つて歸つてお拂ひしますから。

この燕青博魚劇を例に引いて、關撲の法を説明してゐる文獻があるから、序でに言及しておかう。それは清初の揚州畫舫錄卷十六である。

跌成。古博戲也。時人謂之拾博。用三錢者爲三星。六錢者爲六成。八錢者爲八叉。均字均幕爲成。四字四幕爲天分。天分必幕與幕偶。字與字偶。長一尺。不雜不斜。以此爲難。蓋跌成之戲。古謂之純。元李文蔚有燕青博魚曲。其詞云「憑着我六文家銅鏝」又云「你若博呵要五純六純」。五純今謂之拗一。六純即大成。又「……………」二曲摹寫極工。此技遍于湖上。是地更勝。所博之物。以茉莉玫瑰二花最多。

「跌成」の「跌」が頭錢を轉がす意であることは、すでに前に述べた。このなかで、天分について「長一尺、不雜不斜」といふ意味は十分明らかでないが、或はその投げられた頭錢の位置が、一尺の長さで一直線に揃ふことを云ふのであらうか。「均字均幕爲成」とは、錢の表ばかり或は裏ばかりが揃つて出ること、即ち右の戯曲における「渾純」であり、また下記の今古奇觀の例における「渾成」である。

この記録によれば、關撲の戲が清初にも揚州一帯に普遍的に行はれてゐたことが分るが、それが商行爲としてどの程度の比重をもつてゐたか、それとも單に一つの遊びに過ぎないものであつたか、何とも言へない。

しかし元來、この慣習が賭博的な遊びの要素を多分にもつものであることは、すでに宋代の例がよく示す通りである。

「都城紀勝」の「瓦舍衆伎」の條に挙げた雜手藝のなかにも、弄頭錢なる名が出てゐる。想像するところ、頭錢を投げて自由自在にその表や裏を出してみせる藝であらう。更に、これは楊聯陞氏も引いてゐる例であるが、周密の癸辛雜識續集上の「純色骰錢」といふ條に、左のやうな話が載つてゐる。

開理宗朝。春時內苑效市井關撲之戲。皆以小璫互爲之。至御前。則於第二三撲內。供純漫骰錢。以供一笑。

「純漫」の漫は鏤と同じであるが、標題が「純色」とある以上、その骰錢は恐らく赤く染めてあつたに違ひなからう。內苑で、天子を圍んで小宦者どもが戯れに行つた關撲の遊びに、天子の番になると、その第二・三回の撲のなかに、ほんものの頭錢を交へてお笑ひ草にしたといふ話である。この「純鏤骰錢」を楊氏が「兩面に尾か頭の付いた貨幣」「*coins having tails (or heads?) on both sides*」と解されたのは一體どういふことであらうか。あまりに突飛で反駁のしやうもない。

それはともかく、このやうに宮中でその眞似ごと遊びが行はれたとあれば、いくら市井の慣習とはいへ、博徒のやるトバクとは本來別のものであつたことの一つの證明にならう。しかしこれが當時の商行爲の一つとして占める比重がどれほどのものであつたか。たとへ食貨志の類には現れないにしても、一般市民の日常の經濟生活には、かなり深く浸透してゐたのではなかつたかと思ふ。食貨志といへば、それに現れる

もう一つ別の「撲」があるが、それについては最後に言及することとする。

さて第三の實例は、前二例とは逆に、客の側が完敗する例である。清初の短篇小説集「今古奇觀」の第三十八篇「趙縣君喬送黃柑子」のなかに見える。譯文だけを掲げる。

ふと一人の行商人が、一籠の永嘉黃柑子を擔いで表を通りかかった。宣教は呼びとめて訊ねた、その柑子は博けるのか。行商人、へえ二三文の儲けでやらして頂きます。旦那どうか宜しうお願い申します。そこで宣教は頭錢を受けと

つて、下へ撲げる。商人は柑子の籠の側に蹲まつて、一方では錢を拾ひながら數を讀んでいく。ところがお話にならぬのは宣教、一方では錢を撲げながらも、心の方は簾の中から覗いてる例の美人に引かれて、うはの空で抛るものだから、二ときばかりも撲げ詰めたが、とんと一つの渾成さへ當りが出ない。勘定してみると一萬錢も負けてしまった。

この小説の本づく話は、孫楷第氏の考證されたやうに、宋の夷堅志補卷八の「李將仕」の條に見える。それには右の部分がかう書かれてゐる。

……會有持永嘉黃柑過門者。生呼而撲之。輸萬錢。

撲賣の商人が先づ客にいふのは、「二三文の儲け」などといふ常套語である。古今小説でも「何錢か儲けて」云々といつてゐる。だいたい關撲は小規模の商ひが普通だったから、この口上はそれほど大きく割引いて受取らなくてもよからう。しかし極端な場合には、このやうに一萬錢（銀十兩）もの荒稼ぎになることさへあるのだらう。もつとも小説のことだから、夷堅志の話でも少し誇張されてゐるかも知れぬ。

以上で、關撲についての考察は、ほゞ終つた。考へ残した問題や、疑問の點が幾らかあつたが、いづれ他日の解明に待ちたい。序でに、いままで後廻しにして引用しなかつた例二つを掲げておく。

瓦〔市〕中多有貨藥・賣卦・喝故衣・探博・飲食・剃剪・紙画・令曲之類（東京夢華錄卷二、東角樓街卷の條）

相國寺貨雜物處。凡物稍異者。皆以番名之。……市井間。

多以絹画番國士馬以博塞。（獨醒雜誌卷五）

前者の例は、或は「探博飲食」と連ねて讀むべきかも知れぬ

が、探博が果して關撲と同じであるか否かは速斷できない。後者では「博塞」といふ古めかしい表現を用ひてはゐるが、これが實は關撲であることは、ほゞ斷定して誤なからう。この後者の例については、嘗て「宋代の都市生活」（世界美術全集月報9號）の中で言及した時、その書名を失記したので、併せてここに補つておく。

さて最後に、食貨志の類に見える別の「撲」について、簡単に指摘しておきたい。その最も古くは、管見では舊五代史の食貨志の例である。

長興二年詔。應在京諸道苗畝上所徵麴錢等。便從今年夏並放。其麴宮中自造。委逐州。減舊價一半。于在城撲斷貨賣。

この「撲斷」について、加藤繁博士は「入札を行ひ、高價を擬したるものに一手に麴を賣渡すをいふ」（岩波文庫本二三二頁）と註記してをられるので、或は中國經濟史家の間では既に解決済みのことであるのかも知れない。とすれば、ことさらここに持ち出すまでもないことであるが、同じく「撲」

の語を用ひてゐる點で、この關撲との關係を專家の方にお教へ頂ければ幸ひである。袁氏世範下に

買撲。坊場之人……

といふ例があり、西田太一郎氏の譯書に「入札で權利を得て酒の元賣捌を營んでゐる者」（同書二〇四頁）と譯されたのも、五代史と同じ場合のことである。殊にこの例では、買撲といふ全く同じ用語であるので、筆者にとつては興味が深い。右二例の「撲」が、セリ又は入札の謂であるとすれば、關撲の「撲」と如何なる點で相關聯するのであらうか。この頃の入札法の實態を知らない筆者には、早急な推定をも下す資格がないのである。

もう一つ附記しておきたい。それは租稅徵集請負權を取得することを、やはり「撲買」といふことである。このことも中國近世の經濟史を専門とされる方にはより普通の常識であるかも知れないが、右の麴（又は酒）の入札の場合と同様な意味で、わたくしにはやり一つの問題であるので、ここに摘記させて頂く。

前掲の楊氏の論文にも、このことは附説されてゐて、さすがに關撲の場合とは混同せず、はつきり峻別して説かれ、宋・元・清の例が極めて簡單ながら言及されてゐる。楊氏は擧げてゐられないが、宋と元におけるこの *bidding by a tax farmer* (楊氏の譯語) の制度については、すでに大學衍義補三十二にかなり詳しい説明が見られるし、わが伊藤東涯の壺簪錄にも「宋之撲買、明之抽分、皆征也、云云」と言及してゐる(もつとも、抽分と同一視することには問題があらうが)。この場合の「撲」も、やはり入札の意であるとすれば、前記の例とも連なるわけであるが、いづれにしても、關撲の「撲」と、入札の場合の「撲」とが、近世の各期に同時に並行して現れる以上、この兩者の關聯のしかたをどう考へたらよいだらうか。或は全く切り離して考へていいものか。ともかくこの機會に、わたくしなりに疑問を提出しておくに止める。

——昭和二六・七・三〇——

附記・關撲については昨年六月、人文科學研究所の合同研究會で發表したことがあり、その概要が右研究所所報十二號に「東京夢華錄管見」と題して載つてゐる。それは結論だけを簡單にまとめて書いたのであるが、本稿においては、部分的にそれを訂正した點があることを斷つておく。

なほ、本稿に引用した燕青博魚劇の例文の解讀に當つては、嘗て十年前に東方文化研究所でこれを會讀した結果に基づきつつ、その後に見出した資料をも加へ、相當に補訂をしたことを、ここに併せて附記する。

A Side Light on Urban Life
under the Sung (宋) Dynasty

Yoshitaka Iriya

There are several complete documents of the Sung dynasty, which throw light on the contemporary urban life. These documents contain

valuable sociological, economic and ethnological materials; The present author has collected data on "kuan-p'u" from among these documents. The nature of "kuan-p'u" which seems to have played a significant rôle in urban life in the Sung dynasty has not been hitherto made clear. "kuan-p'u" was a kind of betting play and at the same time a form of commercial transaction. There were merchants who made speciality of "kuan-p'u", and peddlers often made use of this method in their dealings. The author elucidates the rules of "kuan-p'u" and its various cases as the result of his extensive documentary search in the contemporary records as well as in the novels and plays, and corrects wrong notions on "kuan-p'u" hitherto held by some scholars. "Kuan-p'u" was practised as late as the Ch'ing dynasty, but it will be responsibility on the part of the economic historian to define the place of "kuan-p'u" in the economic life of urban Chinese.